

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12964

研究課題名（和文）グラッベ作品における自然表象について

研究課題名（英文）Representation of Nature in C. D. Grabbe

研究代表者

児玉 麻美（Kodama, Asami）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：10757628

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000 円

研究成果の概要（和文）：愛国的作家として受容されてきたC. D. グラッベの劇作品における ドイツ的風景に注目し、時代ごとの変化を探った。彼の遺作『ヘルマンの戦い』の中では「ドイツ性」という概念の虚構性が暴露されているが、自然表象を用いた祖国愛の喚起に対する懐疑は、晩年の「悲喜劇的なもの」への関心とも緊密に結びついていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

若きドイツ ロマン派 ビーダーマイアー といった多様な潮流が同時並行的に生じていた三月前期のドイツ語圏文学は、その全貌が非常に捉えがたく、また各事象と時代背景との関わりについて見通すことが困難であった。当研究は劇作家グラッベの全生涯にわたるテキストに分析を加え、ナチス政権期の受容やロマン派詩学との類似・相違などを明らかにすることにより、他の19世紀文献文化学研究において触れられることの少なかった部分に光を当て、さらなる議論のための補助線や手がかりを提供するものである。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the "German landscape" in the historical plays of C. D. Grabbe, who has been accepted as a patriotic dramatist, and explored changes over time. His last work, "Die Hermannsschlacht"(1835-36) exposes the fictivity of the concept of "Germanness," but the skepticism toward the evocation of patriotism through the use of natural representations is closely linked to his interest in the 'tragicomedy' of his later years.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

当研究課題の構想へと至る前段階として、三月前期の文学と政治 についての共同研究がある。課題への取り組み開始以前に得られた研究成果および新たな課題は以下の通りである。

(1) それまでの研究の成果

シンポジウム「引き裂かれた『現在』 1830年代の文学と政治」(日本独文学会秋季研究発表会、2015年)においては、1830年前後の文学作品に見られる様々なナポレオン像の比較を通じて、グラッベの歴史劇『ナポレオンあるいは百日天下』(1831年)に表れる矛盾をはらんだ英雄の描写が、この時代にグラッベが感じていた無価値な現在への意識と緊密に結びついていることを示した。

グラッベの歴史劇を取り上げた先行研究では、群衆および英雄の描写に注目が集まってきたが、申請者の研究ではグラッベ作品のテキスト内に人間の歴史対自然の構図が存在することを論証し、彼のドラマにおける自然表象が人間による理想の投影先から、自律的な存在へと変化させられていった過程を明らかにした。

(2) さらに研究へ向けて

グラッベの郷土作家としての側面はナチス時代以降よく注目されるようになり、デトモルト出身のこの作家を「原ドイツ的」で「自然児的」な、「文明社会から離れた故郷の森の完全な荒々しさ」を体現した存在として賛美する声もたびたび寄せられた。実際、ヘルマン劇執筆中のグラッベの書簡には「子どもの頃から知り尽くしている木々や小道」、「祖国の山と森」といった表現が繰り返し現れているが、彼の「故郷への思い」が肯定的な意味合いを帯びたものであるのかどうかについては一考の余地がある。

2. 研究の目的

(1) フェルキッシュな作家としてのグラッベ像の再検証

グラッベの郷土作家としての側面はナチス時代以降よく注目されるようになり、デトモルト出身のこの作家を「原ドイツ的」で「自然児的」な、「文明社会から離れた故郷の森の完全な荒々しさ」を体現した存在として賛美する声もたびたび寄せられた。実際、ヘルマン劇執筆中のグラッベの書簡には「子どもの頃から知り尽くしている木々や小道」、「祖国の山と森」といった表現が繰り返し現れているが、彼の「故郷への思い」が肯定的な意味合いを帯びたものであるのかどうかについて、歴史劇および書簡等のテキストに即して詳細な検証を行う。

(2) 三月前期におけるグラッベの位置付けについての再考

作家でありながら革命家として政治活動を展開したアルントやヘルヴェーク、カールスバート決議(1819年)で若きドイツの一派として名指しされたハイネやグツコーらと異なり、グラッベやレーナウはメランコリーの性格の強さゆえにしばしば世界苦の作家という独特のカテゴリーに分類され、三月前期ロマン派ビーダーマイアーといった大きな枠組みから閉め出されてきた。(Cowen 1990, Stillmark 1992, Maes 2014)

当課題においては、グラッベの劇場改革の働きかけが観客の教育や啓蒙を念頭に置いたものであることを明らかにし、また彼の独自の演劇論がロマン派の詩論や後の急進的モダニズムとどのような類似・相違を持つかについても考察を加えたい。

3. 研究の方法

(1) グラッベの歴史劇における自然表象

『ヘルマンの戦い』はドイツ性賛美の要素を多分に含んでいることから、作者自身の愛国的熱狂を映し出すドラマとしてこれを捉える見方が主流であったが、とくにナポレオン劇以降に顕著であるグラッベ自身への悲喜劇的なものへの転向を踏まえると、その祖国愛の真正さは一気に疑わしくなる。彼のヘルマン劇の結末に漂う違和感は先行研究においてしばしば言及されてきたものの、それがどの程度グラッベ自身の意図に基づくものであったかという問題については、詳細な検討はまだ十分になされていない。

当研究課題においては、グラッベがヘルマン素材を取り上げた動機が、英雄存在に対する期待や民族的団結への理想ではなく、そうした幻想への徹底的な批判意識に基づくものであったことを論証する。その際、グラッベ自身が「ヘルマン劇を出来る限り読める内容にするために継ぎ足さざるを得なかった」と主張する「冗談、自然描写、感傷性」の三要素に着目し、これらが英雄性ないし男性性を解体するための仕掛けとして重要な役割を果たしていることを明らかにする。

(2) グラッベの演劇論における「冗談」と「感傷性」

従来の劇形式の枠組みを大胆に踏み越えようとするグラッベ作品のラディカルさには早いうちから注目が集まっていたものの(Klotz 1996)その独自性や効果についての分析はま

だ十分とは言いがたく、とくにこの点を彼の演劇論の展開と照らし合わせながら検証する試みはなされてこなかったように思われる。

当研究課題においては、グラッペの演劇論としてまとまった分量で発表された三つのテキスト、『シェイクスピア・マニアについて』『デトモルトとその劇場についての論集』(1827年)と『デュッセルドルフの劇場について』(1835年)を比較しながら考察し、悲劇に笑いの要素を導入する彼の試みがどのような狙いのもとに生まれ、『ハンニバル』のなかで実際に劇作品の形式へと移されたのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 英雄性の解体について

グラッペの遺作『ヘルマンの戦い』(1835-36年)は、彼の郷土愛と祖国史への熱狂を示すテキストとして受容され、とりわけナチス政権期に積極的に上演の機会を得ることになった。しかし、この作品は読み手に困惑を与えるような喜劇的描写に充ちており、とりわけ主人公ヘルマンがゲルマン諸民族の統率に失敗するという結末は、英雄歴史劇としての作品の外枠を完全に破壊してしまっている。

当研究では、この伝統的題材を19世紀の読者にふさわしい内容とするためには必要不可欠の要素であるとグラッペが主張している「自然描写」「冗談」「感傷性」の三要素に着目し、これらの描写が支配者の虚栄心や破壊的本質、国家理由の虚構性などを巧みに暴きながらその権勢を弱めるために意図的に用いられていること、また結末における民衆の主体性や自立性を際立たせる役割を果たしていることをテキストに即して論証した。

(2) 悲劇から悲喜劇への移行

シェイクスピア論において悲劇から距離を取り、「愉快なもの」と「理想」の結びつきによって観客に働きかける喜劇の力を高く評価したグラッペであるが、彼の演劇的理想とはドイツ人が舞台芸術を通じて「健全な人間理性、つねに稲妻のようにひらめく機知、詩的で道徳的な力」に接しうる状況を作り出すことであった。彼は『デトモルトとその劇場についての論集』の中で、ドイツの民衆が「しばしば提示されたものを浅薄で一面的な形でしか捉えられない」という問題を指摘しつつ、一見すると場にそぐわないような舞台表現のうちに真の芸術性が表れうることを粘り強く訴えている。ここにおいて彼が述べる、悲劇と喜劇の「両極端が相通じている」という主張には、悲しみと笑いの混淆状態において生じる違和感や捉え難さについての肯定的な眼差しがすでに萌芽の形で表れている。

劇作品から感傷性や荘重さを排して混合的な様式へ向かおうとするグラッペの傾向は、劇評集『デュッセルドルフの劇場について』でさらに明確化する。悲壮な演出の施された悲劇に対し不満を抱いた彼は、自らの手で「ユーモラスな二重悲劇」を生み出そうという着想へと至る。「同じ観客が優良作品の上演を何百回も喜んで観る」という成熟した劇場文化に憧れを抱くグラッペは、初演時に覚えた不快感が複数回の鑑賞を経て塗り替えられ、「ようやくこの上ない美が明らかになる」というような理解の深化プロセスに着目する。劇評内ではシェイクスピアの『マクベス』演出が一つの理想として提示され、春や夏の穏やかなイメージの中に悲劇の残酷さが「包み込まれる」ことの見事さが訴えられているが、グラッペはこうした形式の溶解が観客にもたらす困惑の持続的効果を狙っていたと考えられる。

フリードリヒ・シュレーゲルが『リュツェウム断片』(1797年)で示した芸術の客観性についての見解を踏まえながら、グラッペは『ハンニバル』の随所に劇中劇的な自己言及の要素を導入し、「まじめさ」の中に「おかしさ」を交えることによって、観客の過度なめり込みや感情移入をあえて抑制してみせた。これにより、ティークが批判したようなグラッペ作品のシニシズムの苛烈さは極限まで高まってはいるが、『ハンニバル』における「笑い」が客観性の保持という目的と関わっていることを考慮すれば、その悲喜劇性は必ずしも破壊的な性格のみをもつものではないように思われる。劇的な状況が虚構性や劇場性の中に包み込まれる瞬間に生じる笑いは、観客に観察と判断の猶予を与え、より深く根本的な理解を促す効果をあげている。真剣さと滑稽さの二重性をユーモラスな愉快さをもって描き、かつそれによって悲哀やペーソスの瞬間を際立たせるという両極的な作用を実現している点において、グラッペの『ハンニバル』はきわめて先駆的な試みを行ったテキストとして評価できる。

(3) 三月前期の劇場と観客

グラッペの劇作品に備わる際立った特徴として、悲喜劇的な分裂性の要素がしばしば指摘される。彼のドラマトゥルギーのもつ「演劇性(Theatralität)」に着目した先行研究は、これが「英雄主義や偉大さ、意味の喪失」という三月前期の時代的特徴をラディカルなやり方で浮き彫りにしたという功績に光を当てている(Maes 2014)。一方、グラッペ作品における喜劇的要素に関しては、苛烈さや過剰さといった側面に注目が集まり、その遊戯性に託された劇場改良の意図についてはこれまで論じられてこなかった。

劇評集『デュッセルドルフの劇場について』(1835年)やオペラ台本『シッド』(1835年)からは、グラッペがシェイクスピアやゲーテ、シラー、ロマン派等の作品と詩論を踏まえつつ、「冗談」「機知」といった要素の導入による演劇改革を視野に入れていたことが読み取れ

る。とりわけ後期の劇作品に頻出する独特のユーモアは、喜劇／悲劇といった従来のジャンル区分を超越したところで、観客に舞台上の出来事を注視させ、客観的な判断を促すための重要な仕掛けとして機能している。また、グラッベが歴史劇の作中における諧謔やイロニーを重視したことの背景には、演劇というメディアそのものの作為性に対する自己批判の狙いもあったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 児玉麻美	4. 巻 21
2. 論文標題 グラッベ『ヘルマンの戦い』における英雄性の解体について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24729/00017883	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 児玉麻美
2. 発表標題 グラッベ『ヘルマンの戦い』の悲喜劇性について
3. 学会等名 オイフォーリオンの会 第90回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 児玉麻美
2. 発表標題 ユーモラスな二重悲劇 歴史劇『ハンニバル』とグラッベの演劇論について
3. 学会等名 阪神ドイツ文学会 第241回研究発表会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 児玉麻美
2. 発表標題 理想の劇場の創出を目指して グラッベの作品における喜劇的要素について
3. 学会等名 日本独文学会2023年秋季研究発表会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------